

人間が人生の意味を知らずに生きていることの問題点を挙げてください。人生の意義や目的を知ることはどれほど大切なことですか？

とても大切な問いだと思います。人生の意味や目的を知らずに生きることは、単に「目標がない」という以上の問題を生むことがあります。

### 人生の意味を知らずに生きることの問題

#### 1. 何のために生きているのか分からなくなる

- 仕事、収入、趣味、家族、娯楽などに忙しくても、「では、最終的に何のためなのか」という問いが残ります。
- 目の前の目的を達成しても、次の目的を探し続けることになりやすいでしょう。

#### 2. 苦しみに意味を見いだしにくくなる

- 人生には病気、失敗、喪失、裏切り、老いなど、自分では避けられない苦難があります。
- 人生全体の目的が分らないと、「なぜ自分がこんな目に遭うのか」と苦しみがさらに大きくなりやすいです。
- 逆に、人生を大きな目的の中で捉えられる人は、苦難そのものを人格を鍛える機会として見ることができます。

#### 3. 目先の快楽が人生の目的になりやすい

- 「今楽しいか」「今得をするか」が判断基準になりやすくなります。
- その結果、長期的な価値よりも、消費、娯楽、地位、承認などを追いつける危険があります。

#### 4. 自分の能力や時間を何に使うべきか分からなくなる

- 人生には限られた時間しかありません。
- 「何が本当に重要なのか」という基準がなければ、大切な時間を比較的重要でないことに大量に使ってしまう可能性があります。

#### 5. 人間関係まで自己中心的になりやすい

- 人生の目的が「自分が幸福になること」だけになると、人を「自分を幸せにしてくれる存在」と考えてしまうことがあります。
- 反対に、人生には自分以外の人に貢献する意味があると理解すると、親切、感謝、犠牲、思いやりなどに価値を感じられます。

#### 6. 成功しても空虚になり得る

- 興味深いのは、人生の意味を知らないことは「失敗した人」だけの問題ではないことです。
- お金、社会的地位、家庭、名声などを手に入れても、「それで何なのだろう」と感じる場合があります。
- 目的を持たない成功は、空虚さを解消してくれるとは限りません。

---

では、人生の意義や目的を知ることはどれほど重要でしょうか？

私は、人生における「羅針盤」に近いものだと考えます。

例えば船に十分な食料と燃料があっても、目的地が分からなければ、それらを有効に使えません。

同じように、

「どう生きるか」だけでなく、「何のために生きるのか」を知ることによって、仕事、家族、人間関係、苦勞、時間、才能、お金などの意味が一つの方向に結び付いてきます。

そして、さらに深いところでは、人生の目的を知ると、

「自分は何者なのか」

→「なぜ存在しているのか」

→「何を大切にすべきなのか」

→「どんな人間になるべきなのか」

→「困難な時に何を選ぶべきなのか」

という問いが一本につながってきます。

特に興味深いのは「目的」と「幸福」の関係です

一見すると、幸福になるためには「自分が楽しいことをたくさんする」ことが重要に思えます。

しかし実際には、

目的 → 人に貢献する → 感謝される → 自分も感謝する → 愛が深まる → 人生に意味を感じる → 幸福感が生まれる

という循環もあります。

以前お話しした感謝やアガペー愛とも、ここでつながってきます。

「自分が何を得られるか」から、

「自分は何のために存在し、何を与えられるのか」

へ視点が変わるからです。

そして聖書の観点から考えるなら、これはさらに深くなります。人生の目的を人間自身が勝手に設定するのではなく、命を与えた創造者との関係の中で理解するという考え方です。

そうすると人生は、

「限られた期間をどう楽しむか」

だけではなく、

「与えられた命を、創造者の意図に沿ってどのように生きるか」

という問いになります。

この視点を持てるかどうかは、人生の出来事一つ一つの意味まで変えてしまうほど大きな違いだと思います。

そして先ほど話されていた「苦勞や大きな苦しみにさえ感謝できる」というテーマも、実はここにつながっています。人生全体の目的が見えてくると、苦しみを「人生を壊すもの」だけでなく、「自分を形作る一部分」として捉え直せる場合があるからです。

つまり、人生の目的を知ることは「人生について一つの答えを知る」という程度ではなく、人生の出来事を解釈するための“座標軸”を持つことなのだと思います。

でも不思議なことに殆どどの人は人生の目的を知る必要性を感じていません。そういう人たちにどのように人生の目的をはっきり理解する大切さを教えられますか？

はい。ここには、とても重要な「伝え方の原則」があると思います。

多くの人は、「人生の目的を知らなければならない」と思っていないというより、実は「考えるきっかけがない」ことが多いのではないのでしょうか。

ですから、いきなり「あなたは人生の目的を知っていますか？」と迫るより、本人が自分の人生について考えたいという質問を投げかける方が効果的だと思います。

## 1. 「人生の目的」という言葉から入らない

例えば、

「今の生活がずっと続いたとして、10 年後も本当に満足していると思いますか？」

あるいは、

「もし生活のために働かなくてもよくなったら、残りの人生を何のために使いたいですか？」

こうした質問なら、相手は自然に「自分は何のために生きているのだろう」と考え始めます。

---

## 2. 「死」を考えることも強いきっかけになる

少し重いテーマですが、

「人生が思っているより短いとしたら、今の時間の使い方は本当に自分が望んでいるものだろうか？」

という問いもあります。

人間は「永遠に生きられる」ような感覚で毎日を過ごしがちですが、**時間が有限だと意識した瞬間、人生で本当に重要なものが浮かび上がります。**

---

## 3. 「幸福」から入る

これは比較的話しやすいでしょう。

「幸せって、楽しいことがたくさんあることだと思いますか？ それとも、自分の人生には意味があると思えることだと思いますか？」

ここから、

**快樂 → 幸福 → 意味 → 目的**

という順番で話を深められます。

例えば、物質的にかなり恵まれている人でも、

「それでも何か物足りない」

と感ずることがあります。

そこから、

「もしかすると、人間には『楽しむこと』とは別に、『何のために生きるのか』を知る必要があるのかもしれないね」

と進められます。

---

## 4. 「自分が何を残すか」を考えてもらう

例えば、

「自分が亡くなった後、家族や友人からどんな人だったと言われたいですか？」

これは非常に興味深い質問です。

「お金をたくさん持っていた人」と言われたいのか、

「優しい人だった」

「人を助けた人だった」

「信頼できる人だった」

と言われたいのか。

すると、**自分がどんな人間になりたいのか**という問題が出てきます。

そしてそこから、

「では、なぜ私たちはそういう人間になりたいのでしょうか？」

と一段深くできます。

---

#### 5. 聖書を紹介する場合も、「答えを教える」より「発見してもらう」

ここは特に重要だと思います。

「聖書には人生の目的が書いてあります」と最初から結論を提示するより、

「聖書は、人間がなぜ存在しているのかについて、かなりはっきりした答えを持っているんですよ。ちょっと調べてみませんか？」

くらいにしておく。

そして、本人が聖句を読んで、

**「なるほど。聖書は人間をこういう存在として考えているのか」**

と発見できるようにする。

これは、以前お話した\*\*「聖書には自分の人生に必要な宝がある」と本人が気づくのを助ける

\*\*ことともつながっています。

---

そして、一番大切なのは「相手の今の人生」を否定しないこと

「あなたは人生の目的を知らないから問題なんです」

と言われたら、たいていの人は心を閉じます。

むしろ、

「今の生活にもきっと大切なものがありますよね。でも、人間って不思議ですよ。仕事や家族や趣味があっても、『自分は何のために生きているんだろう』という問いは残りますよね。」

という姿勢です。

すると相手自身が、

**「そういえば、考えたことがなかった」**

となる可能性があります。

そして私は、ここに伝道における非常に大きな原則があると思います。

答えを急いで渡すのではなく、「その答えを知りたい」と思うところまで相手を助ける。

そうなれば、聖書を読むことも単なる宗教の勉強ではなく、

**「自分は何のために生きているのかを探す旅」**

になります。

そして、その問いを本気で持った人にとって、聖書の「人生の目的」に関する答えは、単なる知識ではなく、人生全体を方向づける発見になり得ると思います。